

まえがき

トレードは生き残りゲーム

株式市場では、参加者の95%が負ける——。いくらなんでも極端だと反論されるが、私を含めた業界の者が口をそろえて言うことだ。

ある銘柄が3カ月で、300円から600円に倍化したとする。株の価値が上がったのだから「多くの人が利益を得た」と感じるかもしれない。だが、それが錯覚なのである。

300円の株が日々、ジグザグの動きをみせながら600円に達する過程では、途中で参戦して利幅の少ない人が多数いるし、目先の高いところに飛びついて投げてしまった人もいる。500円でカラ売りして、100円幅の損を出した人もいるだろう。また、その銘柄を買うために、ほかの銘柄を売ったケースもあるから、マーケット全体ではプラスになっているかどうかわからない。さらには、上がった相場は必ず下がるので、その下げで大損する人もいる。

株式投資は、例えばスポーツのように、一定の時間内で参加者の勝ち負けを判定するものではないから、時間の経過の中でさまざまな行動がある。短期的な上げ波動だけに限定すれば「半分の人が儲かった」という結果もあるだろうが、少しだけ長めの期間では、荒い動きによって参戦者のほとんどが損をすることだって起こり得る。

株式市場では、すべての参加者が自由に行動できる。そして、極めて短期間で資金を10倍、100倍と膨らませるチャンスがある。この

チャンスは、年齢、性別、職業、体力などいっさい関係なく、誰にでも平等に与えられている。これこそが、金融マーケットの魅力であり、同時に魔力なのである。

勝った人は、もっと儲けようと背伸びして、どこかで大きな損を出す。負けた人は、損を取り返そうとムリをして損を重ねてしまう。これが、株式市場の構造だ。市場では毎日、毎月、同じように価格がついているが、大負けした参加者が強制的に退場させられる一方で新たに参加する人がいるだけのことだ。一定の期間が経過すると、95%の人が敗者となっているのである。

プロの本音を聞く機会があれば理解できる。誰もが、「勝つことではなく、大負けせずに生き残ることだ」と語るだろう。

勝者の共通点は“手法”

投資関連の情報を発信する多くの業者は、そんな実態を知りながらも、単純に夢を持たせるような明るい話題しか提供しない。「こうすれば儲かる」と。ラーメン情報誌に「食べ過ぎると健康を害します」と書かれていないのと同じだが、「大切なカネのことだから……」と、情報の受け手が自分の都合で目をくもらせている。

世界中の投資家が、相場の先行きを「当てよう」としているが、その投資家の売り買いで価格が変動するため、誰が挑んでも当たったり外れたりする。それなのに、良識あるオトナたちが、上っ面だけの予測情報に価値があると錯覚して購入し続けているのだ。

こんな“相場難民”状態を脱するキーワードは、「手法」である。予測は当たったり外れたりだ。しかし具体的な対応をまとめた方法論によって、損益という結果をコントロールできる。300円の株が600円になった状態で、そこから買い始める人がいれば、下げを取るためのカラ売りをする人もいる。その後の対応次第では両者とも勝つし、両者とも負けるかもしれない。また、「参加しない」という選択肢もある。連続した決断を司るのが、自らの手で構築した手法なのだ。

本書には、ふだん目にする事のない他人の売買記録とともに、真の実践者による本音の解説が盛り込まれている。理論の解説書は多いが、このような生の記録はたいへん貴重なのである。入り口の理屈にとどまることなく、自らの道を切り開いていくための実践的なヒントが、たっぷりと存在しているはずだ。

本書は主に、日々の終値を見ながら上げ下げの波に乗る、「うねり取り」の手法を紹介している。終値だけでトレンドを判断し、臨機応変にポジションを操作するためには、自分自身がしっかりとしていなければならない。半面、特別なファンダメンタル分析の知識もいらないうし、多くの情報を集める必要もない。対象とする銘柄の終値と、“次の一手”を考える判断基準だけである。

だから普遍的であり、“貴重な記録”との評価も手伝って引き合いが絶えない。私たちも、ぜひ残したい内容だと考えている。これらの事情から、バラコピーの読み物を単行本化したのが2002年、さらに十数年が経過した2016年になって新装刊の発行に踏み切った。

実用性を追究するのがプレーヤー

前述したように、相場という行為は、単に「上か下か」を当てるゲームではない。時間の経過の中で、常に多くの選択肢を与えられ、自分の手で確信ある“次の一手”を選ばなければならない。

手法という発想をもつかどうか第一の関門とすれば、自らの意思で手法の質を高めていこうとする姿勢が、第二の関門である。

だが、この上達の過程にも誤解がある。例えば日常生活で、降水確率が70%なのにカサを持たずに出かけて残念ながら降られたとしても、ズブ濡れのまま歩く人はいない。必ず何かしら対処するだろう。

ところが株式市場には、避けようのない見込み違いに対応せず、ズブ濡れのまま立ちつくしている人が大勢いる。熟練者であっても、たった一度の“筆の誤り”が、破滅につながる可能性を常にはらんでいるのだ。

本書の事例を見て、読者自身の行動をリアルに想像し、「確信ある自分流」を構築してほしいと願う。

2016年11月 林 知之

※本書は、林投資研究所において販売していた『株式売買記録と解説シリーズ』
(A4サイズ、バラコピー)を再編集・製本したものである。

【詳説】うねり取り実践 ～株式売買記録と解説～

分割建玉の基本

現物売買練習の一例	13
1 売買練習の基本	14
2 スズキの売買記録	16

順張りのプロの技

お手本になる「切れのよさ」	31
1 明快な売買	31
2 株式レポートの解説	33
3 あっさりした撤退	35
4 順張りとは逆張り	40
5 不等分割を順張りで	43
6 2回の予備売買を経て	47
7 絶妙なさぐりの玉	54
8 本玉をつくる途上の操作	57
9 手仕舞った理由はなんでもよい	59
10 完全に客観的判断はない	61

11 「あっさり」と「ねばり」	63
12 ひとつの意見	66
13 実践者に対して礼を失ないように	69
14 急伸的な入れ方	74
15 等分割について	77
16 等価格平均法	79
17 「のろさ」について	81
18 片建てのみの操作	84
19 控え目な建て玉	86
20 確かめながら進む	89

ツナギの難しさ

ねらい撃ちの利点とザラバ売買の不利について	95
1 「自分だったら」ということ	95
2 売買以前のことも大事	98
3 狙いは成功	99
4 本玉は有利に入った	102
5 くたびれもうけのツナギ玉	106
6 手仕舞いは逆張りで	111

中源線を使った「うねり取り」

N 氏の現物・信用取引	119
1 53年の売買記録	119
2 備忘的なものを細かく	125
3 現物と信用	126
4 動いているためし玉	129
5 W型の動きの中	131
6 あとからなら何とでも言える	133
7 下手どころか見事だ	136
8 現物は8,000株のみ	142
9 信用とともに29,000株	143
10 安い平均値	145
11 もし自分だったら	147
12 マル取りは不可能	150
13 区切りと「動き」	153
14 ためし玉のドテン	155
15 細かい分割	158
16 分割の間をのばしたら	160

「売り」を極める

二人の計画的売りの比較	163
1 上げは半分、下げは8分	163
2 ケイ線のみのお買	165
3 「売り」というもの	167
4 ためし玉の失敗	169
5 同じように曲がった	176
6 貴重な感覚を得るために	177
7 2度目のためし売り	180
8 倍返し	187
9 倍加法	189
10 内藤氏は3度目の0にした	191
11 いったん手仕舞ったが	200
12 年末残玉ゼロから再び	204
13 売買頻度について	206
14 売買頻度と残玉の比較	209
15 比較を受けとめてみる	211
16 意外に売りのコストは下がらない	215
17 7ヵ月間の内藤氏の売買譜	218
18 玉の動きをみつめて	226

アマチュアからプロへの過程

I 氏の 3 銘柄併行売買	231
1 プロに近づきつつある見本	231
2 3 銘柄で 350 万円の純益	233
3 タイミングをズラすと	242
4 1 週間のズレ	245
5 強弱とはちがう	247
6 アルプスから富士写真へ	258
7 あまりにもスムーズな玉の動き	264
8 手仕舞いは狙ったか?	266
9 狙いすぎとあせり	268
10 年末の区切りから出発	273
11 「区切り」について	275
12 区切りの内容	278
13 売買再開後は生彩を欠く	281
14 5 分割の買い	291
15 材料張りだが	293
16 まさに乗っていた	298
17 なぜか生彩を欠く	300
18 仕事として	306
19 先入観があった	309

20	再び見事な売買	315
21	細かい売買からゆっくりした売買に	321
22	56年5月～57年2月の場帳と売買	323
23	まだ心理的に迷いあり	334

本書にある売買内容の表記について

- 数字は通常「1 単位」を表す。
つまり売買の最低単位が 1,000 株なら「1」= 1,000 株となる。
- 数字の左右にある「-」は売り買いを示す。数字の左にあるときは「買い」、右にあるときは「売り」を意味する。

- 1	1,000 株買い
1 -	1,000 株売り

 (売買単位 1,000 株の場合)
- ※その日行われた売買の内容だけでなく、残玉 (残っている現在のポジション) についても同様である。
- 日付はすべて約定日を表す。
- 残玉を示す場合、ツナギの玉を分けている場合がある。
たとえば、「現物 10,000 株、信用取引の売り 5,000 株」の場合、「5 - 10」となる。
- 場帳に自分の売買や残玉を記入することはないが、読みやすいので本書ではそうしてある。
読者は、場帳には終値だけ、他は玉帳に記入してもらいたい。

分割建玉の基本

現物売買練習の一例

埼玉県越谷のK氏の練習売買をみてる。資料と売買の練習のための条件などは下記のとおり。

① まず資料など

伝票（売買報告書）は21枚

証券会社は東京の三洋証券

日付は昭和54年（1979年）5月4日から

昭和55年（1980年）2月20日まで

② 目的は波のり練習売買

③ 資金は100万円

④ 現物売買の一方通行

⑤ 逆張りナンピン分割買い

⑥ グラフは大引の折れ線グラフのみ（中源線の転換を記入してあるが、それにこだわっていない）

⑦ 1ミリ1円 1日2ミリ移動

⑧ 週足、月足は見ない。引いていない

1 売買練習の基本

売買には、基本の考え方と方法とがある。その基本がわかれば、あとは自然に上達してゆくことが出来る。

しかし、その基本は机の上の研究では、わからない。実際に売買練習を、くり返し、手ならしをやりながら覚えた基本は、体得したものであって忘れることがないし、応用もきく。

相場の実戦で、本当に利益をあげる基礎練習をするには、次のようなことが必要である。

(1) 銘柄を1銘柄にしぼる（1銘柄だけの売買に限定する）

(2) 基本の売買は、

押し目の安値を、

-1

-1

-1

と3分割に分けて、押し目買いで、安値を、拾ってゆく（2分割でもよい）。

(3) そして、高値になれば、これを

1-

1-

1-

と分けて、手仕舞うか、あるいは

と手仕舞ってもよい。

このくり返しを、やっているうちに、相場のリズムも、わかってくる。どこで買ってどこで売るべきかも、わかってくる。

この基本の練習を、忠実に守り成果をあげた埼玉のK氏の売買記録を、その値動きと共に追ってみよう。

* * *

K氏は、売買練習の対象の銘柄として、比較的、地味なスズキを選んだ。スズキは、同じ自動車株の中でも花形ではないし、値動きも地味だ。しかし、銘柄は何でもよいのだ。要は一銘柄に限定して、自分なりの定石か基本を守れば、よいのである。

K氏は、このスズキを、現物の買いだけで練習した。信用取引は一切やらない。したがって、ツナギは全くやらない。

現株の買いは、最高3,000株（-3）まで。

資金は100万円。これは〔-3〕と建玉した時に、100万円の資金を使用したことになるが、実際には、〔-3〕（3,000株の買い持ち）とすることはまれで、資金にゆとりを持っている。

大体、このような前提を知って、読者も、値動きと共に、K氏の見事な練習の売買記録を、追ってもらいたい。

2 スズキの売買記録

売買の記録は、54年（1979年）5月から55年2月の10ヵ月である。

【注意】

1. 売買伝票は5月4日分からだだが、K氏の玉帳の写しには、4月10日のホンダから入っており、スズキは5月からである。
2. 『あなたも株のプロになれる』の中で立花氏が用いた1ヵ月毎の値動き場帳に売買を記入してゆく玉帳が見やすいので、その形式をあとで示す。なぜなら、売買の粗密がよくわかるからだ。

初心者ほど、毎日の値動きを気にしすぎるくせに、玉を動かさない。1ヵ月毎の動き（値と玉と）をみると売買頻度もよくわかるからである。
3. 立花氏は売買を寄付のみに限定しているが、K氏は寄付のときもあり、寄付後のときもあるので、立花氏の記帳の仕方に「売買値」の項目をひとつ設けた。
4. この期間の全売買をはじめにのせると、あまりに簡単なので誤解されるかもしれない。だからこの期間の全部の売買について、各月の値動きとともにのせ、まとめたものは最後に掲載する。

昭和54年4月 スズキ

日	大引	寄付	売買値	売買	残玉
1	日				
2	236				
3	245				
4	250				
5	251				
6	240				
7	250				
8	日				
9	249				
10	237				
11	240				
12	247				
13	272				
14	275				
15	日				
16	270				
17	267				
18	283				
19	297				
20	307				
21	休				
22	日				
23	307				
24	308				
25	319				
26	309				
27	317				
28	323				
29	日				
30	休				

昭和54年5月 スズキ

日	大引	寄付	売買値	売買	残玉
1	312				
2	306				
3	休				
4	304	309	309	-1	-1
5	休				
6	日				
7	301				
8	290				
9	291				
10	291				
11	298				
12	296				
13	日				
14	289				
15	285				
16	291	287	287	-1	-2
17	279				
18	279				
19	休				
20	日				
21	298				
22	281				
23	292				
24	283				
25	283				
26	283				
27	日				
28	281				
29	275				
30	274				
31	264				

昭和54年6月 スズキ

日	大引	寄付	売買値	売買	残玉
1	259				
2	265				
3	日				
4	263				
5	255				
6	280				
7	280				
8	277				
9	275				
10	日				
11	270				
12	288				
13	286				
14	298				
15	313	305	307	1-	-1
16	休				
17	日				
18	308				
19	306				
20	322				
21	316	321	325	1-	0
22	313				
23	318	313	310	-1	-1
24	日				
25	314				
26	314				
27	308				
28	314				
29	320				
30	318				

昭和54年7月 スズキ

日	大引	寄付	売買値	売買	残玉
1	日				
2	310				
3	310				
4	315				
5	315				
6	315				
7	309				
8	日				
9	306				
10	292				
11	288	296	296	-1	-2
12	290				
13	280	286	288	-1	-3
14	288				
15	日				
16	286				
17	287				
18	294				
19	304				
20	304	309	309	1-	-2
21	休				
22	日				
23	298				
24	292				
25	297				
26	297				
27	299				
28	300				
29	日				
30	298				
31	293				

昭和54年8月 スズキ

日	大引	寄付	売買値	売買	残玉
1	297				
2	327				
3	337	340	340	2-	0
4	340	340	340	-1	-1
5	日				
6	340				
7	335				
8	330				
9	322				
10	332				
11	334				
12	日				
13	323				
14	323				
15	325				
16	323				
17	321				
18	休				
19	日				
20	319				
21	313	316	313	-1	-2
22	317				
23	311				
24	308				
25	308				
26	日				
27	315				
28	313				
29	328				
30	317				
31	328				

昭和54年9月 スズキ

日	大引	寄付	売買値	売買	残玉
1	320				
2	日				
3	320	325	320	-1	-3
4	311				
5	313				
6	316				
7	311				
8	320				
9	日				
10	313				
11	314				
12	315				
13	326				
14	324				
15	休				
16	日				
17	317				
18	314				
19	318				
20	315				
21	317				
22	311				
23	日				
24	休				
25	311				
26	309				
27	332				
28	340	345	{ 340	{ 1-	-1
29	340		{ 345	{ 1-	
30	日				

昭和54年10月 スズキ

日	大引	寄付	売買値	売買	残玉
1	325				
2	321				
3	323	321	321	-1	-2
4	319	323	315	-1	-3
5	316				
6	314				
7	日				
8	317				
9	313				
10	休				
11	305				
12	301				
13	304				
14	日				
15	305				
16	302				
17	299				
18	295				
19	290				
20	休				
21	日				
22	279				
23	288				
24	279				
25	287				
26	285				
27	285				
28	日				
29	300				
30	310				
31	300				

昭和54年11月 スズキ

日	大引	寄付	売買値	売買	残玉
1	298				
2	293				
3	休				
4	日				
5	290				
6	296				
7	288				
8	290				
9	300				
10	310				
11	日				
12	323				
13	319	328	328	1-	-2
14	325				
15	314				
16	320	313	323	1-	-1
17	休				
18	日				
19	320	325	326	1-	0
20	314				
21	300				
22	304	300	300	-1	-1
23	休				
24	303				
25	日				
26	302				
27	308				
28	306				
29	304				
30	310				

昭和54年12月 スズキ

日	大引	寄付	売買値	売買	残玉
1	313				
2	日				
3	314				
4	308				
5	306				
6	309				
7	309				
8	308				
9	日				
10	309				
11	309				
12	306				
13	308				
14	301				
15	休				
16	日				
17	309				
18	305				
19	307				
20	304				
21	316				
22	306				
23	日				
24	307				
25	309				
26	307				
27	311				
28	310				
29	休				
30	日				
31	休				

昭和55年1月 スズキ

日	大引	寄付	売買値	売買	残玉
1	日				
2	休				
3	休				
4	310				
5	309				
6	日				
7	309				
8	304				
9	301				
10	300				
11	298				
12	294				
13	日				
14	304				
15	休				
16	301				
17	298				
18	297				
19	休				
20	日				
21	299				
22	302				
23	307				
24	302				
25	301				
26	299				
27	日				
28	295				
29	299				
30	297				
31	295				

昭和55年2月 スズキ

日	大引	寄付	売買値	売買	残玉
1	298				
2	303				
3	日				
4	320				
5	318	320	320	1-	0
6	309				
7	300				
8	299				
9	300				
10	日				
11	休				
12	300				
13	295				
14	295				
15	294				
16	休				
17	日				
18	288				
19	286				
20	289	285	285	-1	-1
21	290				
22	290				
23	294				
24	日				
25	290				
26	287				
27	287				
28	285				
29	275				

以上の経過をみると、K氏が値動きを追いながら「頃はよし」という具合に飛び込んで、そして引き上げる様子がよくわかる。

読者も値動きを追いながら、安値になったら「-1、-1、-1」と押し目を拾い、そして高値で手仕舞ってゆく基本を読みとっていただきたい。

また、1ヵ月にどれくらいの売買回数（頻度）か、とび込むとき、また手仕舞いのタイミングなどを「体得」（まではいかない。体得はやってみなければわからないのだが、ゴルフのクラブの振り方をテレビで見るような気持ちで見るように）していただきたい。

それが、長々と書く解説や、一方的な批判を読むよりも、ずっと効果のあがる方法なのだ。なるほど、相場で玉を動かすとはこういうものだと、ということがわかるだろう。

ここには衝動買いというものはほとんどない。相場の波の中で、中勢的なものを見ながら、押したところを、

-1

-1

-1

と買い下がっている。

そして高値になれば、逆張りでその高値を利喰っている。ほとんど完璧に近い練習売買といえる。

相場とは、簡単にいえば、安値を逆張りで買い下がり、高値になれば、それを手仕舞って、また安値で、買い下がるそのくり返しであ

る。そういった簡単な基本を、本当に体にたたきこむためには、このようなくり返しの練習で、実感としてやってみるのがもっとも効果的である。

さて、この売買で最後の2月20日、285円の1,000株〔-1〕の買いは別として、のべ11,000株の現株を買ったことになる。その間の利益は100,264円である。

100万円弱の資本で、それもかなりゆとりのある簡単な売買のくり返しで、これだけの利益が、着実にあがっていることにも注目して欲しい。

ただし、この練習売買の中にも、改善すべき点は若干ある。それは高値の利喰いのあと残玉0となって、手がすいたところで、次の買い玉〔-1〕が早過ぎるときがあるのだ。

6月15日と21日、307円、325円でそれぞれ利喰い買いの手仕舞いをして〔0〕になったのち、2日後の6月23日には、310円でもう〔-1〕の買い玉を入れている。このような例が、8月3日の利喰いの後には、翌日の買い、11月19日の場合には3日後というように行われている。

たとえ目先天井であっても「天井の翌日は底ではない」わけで、ここはもう少し押しを待って〔-1〕のスタートをきりたい。

この点を改善すれば、この間の利益は更にあがったであろう。しかし、そういったこまかい分析は別として、全体としてやはり見事な練習売買として、おおいに学ぶところがある。休みの日の午後にも、

じっくりと値動きを追いながら、自分で売買したつもりで、参考にさせていただきたい。

なお、全期間の売買を並べてみると、次のようになり、あまりにも簡単なので、果たして、これでよいのか、と思われるかもしれない。

しかし、これがほんとうの売買であり、玉の動きなのである。

5月 4日	309	-1	-1
16日	287	-1	-2
6月15日	307	1-	-1
21日	325	1-	0
23日	310	-1	-1
7月11日	296	-1	-2
13日	288	-1	-3
20日	309	1-	-2
8月 3日	340	2-	0
4日	340	-1	-1
21日	313	-1	-2
9月 3日	320	-1	-3
28日	340	1-	-2
28日	345	1-	-1
10月 3日	321	-1	-2
4日	315	-1	-3
11月13日	328	1-	-2
16日	323	1-	-1
19日	326	1-	0
22日	300	-1	-1
2月 5日	320	1-	0
20日	285	-1	-1